小地域福祉活動事例集

Vol.8

社会福祉法人　滋賀県社会福祉協議会

平成 26 年 3 月発行

はじめに

小地域福祉活動とは、自治会や小学校区など生活の場である身近な地域を単位として、誰もが安心して、生きがいをもって生活できる地域づくりのために、地域の福祉課題の解決をめざして進める住民主体の福祉活動です。また、人々の生活スタイルや価値観の変化にともなって、地域の課題が多様化・複雑化しているなかで、住民だけでなく、社会福祉協議会等の専門機関と協力しながら進めていくことがより一層求められています。

小地域福祉活動には、住民の福祉学習・啓発活動、ふれあい・交流活動、見守り・助け合い活動、災害に強いまちづくりのための活動などがあります。滋賀県では、特にふれあい・交流活動の一つとしての「ふれあい・いきいきサロン」の取り組みが顕著で、高齢者サロンをはじめとして、子育てサロン、障害者サロン、世代を越えて誰でも参加できるサロンなど、県内約 1,700 の地域で特色ある活動が展開されています。

この事例集では、滋賀県内で取り組まれているサロンや助け合い活動、自主防災活動など、6つの事例について、それぞれの地域の特色や課題に応じて、自分たちでできることを考えながら活動されてきた経過や現状とともに、取り組むなかでの気づきや地域への思いを紹介しています。

これらの事例を通して、これから自分の住むまちで福祉活動を推進されようとしている、あるいは既に活動をされている民生委員児童委員、福祉推進員、福祉委員、自治会役員、ボランティアなどの方々が、地域ぐるみで活動をすすめていくうえで大切な視点やポイントを感じとっていただき、今後の活動の参考にしていただければ幸いと存じます。

目　次

小地域福祉活動の活動内容 ……2

事例1　彦根市稲枝地区社会福祉協議会……3
～災害時要援護者の支援体制の確立に向けて～

事例2　虎姫福祉の会……5
～思いがカタチになる場所「は～とらンド」の取り組み～

事例3　近江八幡市安土町常楽寺東横町見守り支え合い隊……7
～お互いさまで支え合える地域づくりを目指して～

事例4　特定非営利活動法人　篠原シニアネット……9
～住民の力を分け合って行う地域づくり～

事例5　鎌掛地区社会福祉協議会……11
～“地域愛”を育む～

事例6　愛荘町 東円堂福祉ボランティアまどか……13
～「つながりづくり」と「生活支援」から、
高齢者の社会的孤立を防ぎくらしを守る～

※文中では民生委員児童委員を「民生委員」、社会福祉協議会を「社協」と表記しています。

小地域福祉活動の活動内容

1. 住民の福祉学習・啓発活動

地域住民が社会福祉への関心をもち、福祉活動に参加する気持ちを高めるための学習や啓発をする活動です。具体的には、空き缶拾いや公園の清掃などの「美化活動」、講演や地域の福祉課題について話し合うことにより、地域住民の社会福祉への理解を深める「福祉講座（体験講座）・ボランティア講座の開催」、福祉委員会の活動の様子や福祉講座の内容などを伝えることにより、社会福祉への理解をすすめるための定期的な「広報誌の発行」などがあります。

2. 福祉問題発見活動

地域の福祉問題を発見、把握する活動です。問題について住民がともに考え、課題を共有し、協働するための大切な取り組みです。具体的には、地域住民が地域で感じていることや起こっている問題について話し合う場である「小地域懇談会」、近隣の助け合い活動や日常の見守り、緊急時の素早い対応のために、自分たちの地域に民生委員児童委員や一人暮らしの高齢者など、どのような方がいるのかを地図に落とすことによって整理する「福祉マップ（地図）づくり」、地域住民の社会福祉に対する意識や福祉課題を把握するための「意識調査・実態調査」などがあります。

3. ふれあい・交流活動

地域住民同士がふれあい、交流する活動を通して、つながりや地域での居場所をつくるための活動です。地域の福祉問題を発見・把握し、新たな活動へ展開したり、見守り活動の役割も果たしたりする大切な取り組みです。具体的には、誰でも気軽に参加でき、地域住民のふれあいやつながりづくりの場である「ふれあい・いきいきサロン」、子どもや高齢者、障害者との交流やつながりづくりを進める「ふれあい交流」、“孤食”をしている方が一緒に食事をすることによって仲間づくりにつなげる「ふれあい食事会（会食会）」、「つどい」、「子育てサークル」などがあります。

4. 見守り・助け合い活動

地域住民の“お互いさま”の活動です。「ちょっと助けて」と気軽に言える関係づくりを進めることによって、支援を必要とされている方の地域からの「孤立」も防ぐことができます。具体的には、ボランティアによるお弁当の配食活動や郵便配達員、新聞配達員による「安否確認」、高齢者の一人暮らしのゴミ出しを近隣住民で手助けするといった「助け合い活動」などがあります。

小地域福祉活動の内容	活　動　例
1.住民の福祉学習・啓発活動	○美化活動　○福祉（体験）講座　○ボランティア講座　○広報誌の発行
2.福祉問題発見活動	○小地域懇談会　○福祉マップ（地図）づくり　○意識調査、実態調査
3.ふれあい・交流活動	○ふれあい・いきいきサロン　○ふれあい交流　○ふれあい食事会　○つどい　○子育てサークル
4.見守り・助け合い活動	○安否確認　○助け合い活動

※それぞれの活動を組み合わせて一緒にすることも有効です。
（例えば、「ふれあい・いきいきサロン」で「ふれあい食事会」をするなど）

事例 1

彦根市稲枝地区社会福祉協議会

～災害時要援護者の支援体制の確立に向けて～

地域の概要

彦根市稲枝地区は、市の南西部、荒神山の近くに位置し、田園地帯の広がる自然と人情の豊かな地域で、昭和43年に稲枝町が彦根市に合併され、市の稲枝地区となりました。現在、人口は約13,000人、高齢化率は27.1%（H25.10現在）です。

地区社協の概要と最重点事業 ～わたしの町の助け合いネットワークづくり～

稲枝地区社協（以下、地区社協）は、「だれもが人間らしく健康で安心して暮らせるまちづくり」を基本理念に、住民の主体的・積極的な参加による自治に根ざした小地域福祉活動を活発に展開しています。

なかでも、「①**災害時要援護者の避難支援体制**」と「②**高齢者世帯等への生活支援体制**」の２点を確立することを最重点活動として位置づけ、平成19年度に『わたしの町の助け合いネットワークづくり』事業をスタートさせることを打ち出しました。

稲枝地区は元々福祉活動が活発な地域であり、とくに自治会単位の「町別ボランティアグループ」が小地域福祉活動の土台となっていました。「町別ボランティアグループ」は、平成13年度から組織づくりがはじまり、現在37町のうち26町で結成されています。高齢者サロンや子どもの登下校時の安全活動、清掃活動等各町のニーズにあった様々な活動を展開しています。

しかし、全国各地で頻発する災害と彦根市の災害リスク、そして加速する少子高齢化の進展と地域関係の希薄化等の状況を踏まえると、「現在の活動を発展させながら、次のステップに進む必要性を強く感じた。」と地区社協会長の藤田さんは当時を振り返り話します。

稲枝地区社協平成25年度活動概要

1）**組織基盤強化の推進**
　地域福祉ネットワークづくりの推進、町別ボランティア組織の結成、「わたしの町の助け合い」ネットワークづくりの推進　他

2）**財政基盤強化の推進**
　チャリティゴルフ・チャリティバザー　他

3）**福祉教育対策**
　防災研修会、福祉講座、広報誌の発行　他

4）**高齢者福祉対策**
　ふれあいサロンの支援　他

5）**障害者福祉対策**
　車椅子の貸出し事業　他

6）**児童福祉対策**
　登下校の安全指導支援、こどもまつり　他

7）**その他事業**
　共同募金運動　他

「①災害時要援護者の避難支援の確立」に向けて

彦根市は、断層（鈴鹿西縁断層）や大きな川（芹川、犬上川、宇曽川、愛知川）があり、琵琶湖西岸断層地震や南海トラフ地震の影響も危惧されるなど災害リスクが高い地域です。全国各地で台風、水害、地震等により大切な命が奪われ、とりわけ要援護者が犠牲になることが繰り返されてきた状況を踏まえ、①**災害時要援護者の避難支援体制の確立**に重点的に取り組むことになりました。

まずは、「地域の防災力を高めるために、とくに支援が必要な高齢者や障害者等の避難支援体制が必要なことを住民が理解し、共有していく必要がある」との考えにより、平成22年度に研修会をすることからスタートしました。

その後、各町の実情にあわせ、「防災・福祉マップづくり」を推進していくことになりました。

稲枝地区下石寺町の防災･福祉マップづくり

▲民生委員、福祉部長合同学習会にて

稲枝地区の中でも、先駆的に取り組みを進めたのが下石寺町です。研修会に参加してから、何度も話し合いを行った結果、「防災･福祉マップ推進委員会」を立ち上げマップを完成させ、今後の取り組みの方向性を整理しました。「マップはつくることが目的ではなく、皆で災害を想定して話し合うこと、気づくこと、また、要援護者参加の訓練で検証することが大事。そして支援者を複数選定することで、負担がかからないようにし、要援護者との信頼関係を築くことが大切です。」と自治会の西川さんは話します。また､平成25年度からは、稲枝地区内で同様の取り組みが一層進むよう、出前講座を実施し取り組みを伝えています。

【経過】

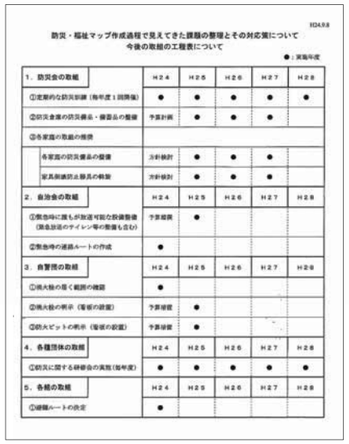
平成22年度
- 地区社協主催の研修会に参加
- 「下石寺町防災・福祉マップ作成プラン」を発表
- 「災害に強い福祉のまちづくりアンケート」を実施

平成23年度
- 「防災・福祉マップ推進委員会」の立ち上げ
- 災害を想定して見えてくる様々な課題の意見交換

平成24年度
- 福祉マップにかかる各種様式の検討
- 要援護者の訪問と支援者の調整
- 自治会への答申（12回の検討会を経て9月答申）

※防災・福祉マップの完成
- 各組ごとの気軽な話し合いの場
- 今後の取組工程表の作成

平成25年度
- 工程表に基づく取り組みの実施
- 稲枝地区社協主催「福祉講座」にて実践報告
- 他町に出前講座



H24.9.8

防災・福祉マップ作成過程で見えてきた課題の整理とその対応策について
今後の取組の工程表について

●：実施年度

1．防災会の取組	H24	H25	H26	H27	H28
①定期的な防災訓練（毎年度１回開催）	●	●	●	●	●
②防災倉庫の防災備品・備蓄品の整備	予算計画	●	●	●	
③各家庭の取組の推奨					
各家庭の防災備品の整備	方針検討	●	●	●	
家具転倒防止器具の斡旋	方針検討	●	●	●	
2．自治会の取組	**H24**	**H25**	**H26**	**H27**	**H28**
①緊急時に誰もが放送可能な放送設備（緊急放送のサイレン等の整備も含む）	予算検討	●			
②緊急時の連絡ルートの作成	●				
3．自警団の取組	**H24**	**H25**	**H26**	**H27**	**H28**
①消火栓の届く範囲の確認	●				
②消火栓の標示（看板の設置）	予算検討	●			
③防火ピットの標示（看板の設置）	予算検討	●			
4．各種団体の取組	**H24**	**H25**	**H26**	**H27**	**H28**
①防災に関する研修会の実施（毎年度）	●	●	●	●	●
5．各組の取組	**H24**	**H25**	**H26**	**H27**	**H28**
①避難ルートの決定	●				

▲防災・福祉マップづくりの課題と今後の工程表

「こうした先駆的な取り組みを『下石寺モデル』として、他町にも普及していきたい」と、地区社協事務局長の冨江さんは話します。

また、昨年９月の台風18号では、彦根市においても避難指示が出され、市全体で64施設を避難所として開設されましたが､「対応がわからなかった、市民に情報伝達がうまくいかなかった」等の課題も聞いており、今後ますます対策強化をしていく必要があると地区社協では考えています。

▲下石寺町の避難経路とマニュアル

地区社協の今後の展望

①**災害時要援護者の避難支援体制の確立**に向けては、台風18号時の対応も教訓にしながら、「下石寺モデル」を他町に普及させる、また平常時における②**高齢者世帯等への生活支援体制の確立**に向けては、地区社協として研究を進めながらモデル地区を選定する等工夫しながら進めていくという展望を持っています。

また、地区社協や各町の日頃からの事業や見守り、声かけ等の取り組みを強化することが、“災害に強い稲枝”をつくっていくことになると考えています。

事例 2

虎姫福祉の会

～思いがカタチになる場所「は～とらンド」の取り組み～

地域の概要

虎姫地区は、姉川、高時川、田川などの豊かな水に恵まれ、田畑や集落が開かれた地域です。昭和15年に虎姫村から虎姫町に、平成22年に長浜市と合併して市の虎姫地区となりました。

世帯数約1,800、人口約5,300人で、高齢化率約28%（2014年３月現在）の地域です。１学区のみのこぢんまりとした地域であることから各種事業や催しを通じた住民同士のまとまりがあります。

「は～とらンド」誕生のきっかけ

「は～とらンド」が誕生したのは平成25年11月。運営にあたるのは「虎姫福祉の会」です。

平成22年の合併に伴い、虎姫地域独自のきめ細かい福祉活動に取り組むために、「虎姫福祉の会」を設立しました。設立当初の活動内容は合併前の町社協の事業を引き継いだものが多く、新たな虎姫独自の取り組みをしたいという思いが会のメンバーにありました。

そんななか、平成24年に長浜市社協が「地域福祉活動計画」を策定することになり、計画に虎姫の思いを反映するために、平成24年10月から25年２月の間に「地区別委員会」を、福祉の会が中心となり開催することになりました。

委員会の中では虎姫がより暮らしやすいまちになるようにと、虎姫のいいところや気になるところ、不安なところなどを話し合いました。そして、委員会で出た意見は「地域内の住民の意思の通い合う《感じ合う・響き合う》環境をつくりたい」という思いに集約され、「各種の層・年代の人が交われる居場所（コミュニティ・カフェ）としての“は～とらンド”」を設立することを共通認識しました。

◀「は～とらちゃん」
「は～とらンド」の名前は、虎姫福祉の会のマスコットキャラクター「は～とらちゃん」にちなんで名づけました。

設立に向けて

委員会で高まった気持ちを具体的な取り組みへと繋げていきたいというメンバーの思いから、「は～とらンド設立準備委員会」を立ち上げ、その後「企画委員会」へと段階を踏みながら設立に向けての話し合いを行いました。

企画委員会のメンバーは福祉の会の役員のみでなく地域のいろんな人に参加してもらいたいとの思いから広報で募集も行い、33名でスタートしました。委員会の中では「男の料理教室」や「虎姫の歴史講座」、「自分たちも楽しめるおいしいコーヒーの淹れ方講座」など、メンバーそれぞれの“やりたいこと”“できること”を出し合いました。

「誰が当番をするのか」など運営を考える上で懸念することもありましたが、「やってみないとわからない。欲張らずに、とりあえずやってみよう」ということになり、平成25年11月に開園しました。

▲企画委員会の様子。やりたいこと、できることに名前を貼っていきます。

「は～とらンド」の活動

毎週月曜日と水曜日の10時～15時、市社協の虎姫センター内で活動しています。カフェのほかに歌声喫茶やコーヒー講座、囲碁サロン、DIY（日曜大工）講座など様々な企画を行っています。

講師の方にきてもらうこともありますが、歌声喫茶でのギター演奏や、日曜大工のリーダー、活動内容の写真展示など、メンバーが特技を活かしながら活動を行っています。

活動の内容は、「企画委員会」から名称を変えた「運営委員会」で決めています。「料理」「趣味・サークル」「子育て」「その他」と４つのグループに分かれており、月に１回それぞれのグループの代表が集まって話し合います。季節行事のクリスマスや節分、花祭りやお花見ウォーキングなどに加えて恒例のイベントもあり、毎月内容が盛りだくさんです。

おもちゃ図書館と合同企画でクリスマス会を開いたことで、子どもやお母さんの居場所にもなっていたり、地域ごとのサロン活動で「は～とらンド」を訪れたりと、他の活動とも交流しながら幅広い層の人が集まれる場となっています。

◀歌声喫茶の様子。ギターが得意な男性ボランティアによる演奏です。

▼

活動の機動力

虎姫福祉の会には、男性の活動者が多くいることが特徴の１つです。いわゆる団塊の世代の元気な人は地域にたくさんいましたが、今まで力を発揮する場がなかなかありませんでした。しかし、「は～とらンド」ができたことで、自分たちの特技を活かして地域のために活動できる場ができました。

また、福祉の会のメンバーにはもともと女性が少なかったのですが、「は～とらンド」で子ども向けのイベントなどを行うことで、お母さん方の関わりも増えてきました。

支援する側・される側と分かれるのではなく、スタッフも参加者もみんなでつくっていく場となっています。

「は～とらンド」のこれから

参加した人がまた新しい活動を提案し、活動の範囲はどんどん広がっています。「何か１つに活動を絞るのでなく、何でもできる場所として、いろいろな人が関わりながら活動を行っていきたい」と福祉の会会長の田邉さんは言います。

「は～とらンド」が地域の居場所となるように、イベント等の開催がない時は福祉の会の活動やサロンの打合せなどに利用したり、隣にある図書館で借りた本を読む場所として使用したりします。民生委員や日赤奉仕団のメンバーの出入りもあり、いろいろな団体の人が気軽に集まれる場にもなってきています。現在の活動日は週に２日ですが、今後は毎日開放できる居場所にできればとも考えています。

「は～とらンド」の活動はまだ始まったばかりです。「おせんどさん」（方言で“お互い様”の意味）、「だしかいな」（“ええじゃないか”の意味）の精神で、今後もみんなで楽しみながら集い合える地域の居場所としての活動を展開していきます。

事例 3

近江八幡市安土町常楽寺東横町 見守り支え合い隊

～お互いさまで支え合える地域づくりを目指して～

地域の概要

近江八幡市安土町常楽寺東横町はJR安土駅前から安土小学校の南側、東側、北側を囲む形で位置し、商店街を含め古くからある世帯を主として、一部、新しい世帯がある地域です。

常楽寺東横町は、人口144人、54世帯で、高齢化率は43%と高く、今後も高齢化が徐々に進み、一人暮らし世帯や高齢者夫婦世帯の増加が見込まれるなか、お互いさまで支え合える地域づくりをすすめる必要性が上がってきました。

見守り支え合い隊の発足

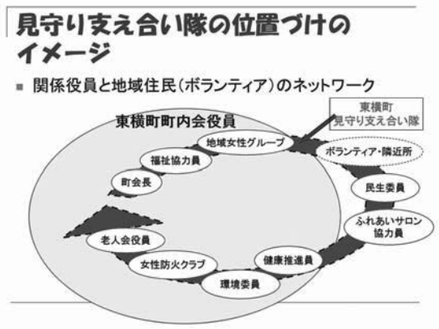
見守り支え合い隊発足のきっかけは、前町会長が粗大ごみ収集の日の夕方、年配の方が一輪車などで大きな棚などを運んでいる様子を見かけ、「とても大変な思いをされている、危険な状況である」と感じたことから。

「地域の助け合いで何とか対応できないか」、「支え合いの中心となるネットワークができないか」、との思いで町会長と福祉協力員による発起人会において検討を始めました。

回覧で呼びかけ、依頼のあった粗大ゴミ搬出の支援を行うなど、動きながら民生委員も交えて検討を重ね、全戸への説明会を経て、平成24年9月、見守り支え合い隊の発足に至りました。

見守り支え合い隊では、お互いさまで支え合いができる地域づくりを目指して、町内会の福祉に関わる役員や担い手がネットワークを作り、無理せず、ちょっとした簡単な活動から取り組みを進めています。

見守り・支え合い隊の取り組み
①見守り・声かけ活動
②暮らしのお手伝い
③地域のつながりづくり（ふれあい交流・啓発）
④町内会活動のサポート
⑤課題の共有と課題方法の検討



つながりづくりを大切にした取り組み

4月のふれあいサロン（お花見会）、8月の夜市、1月の獅子舞見学など、年齢に関わりなく、住民が出会い、つながりあえる場づくりを大事にしながら、見守り・支え合い活動を進めています。

その準備にあたっても、いろんな人が関われるように工夫をしています。例えば夜市で沿道を飾る吹き流しづくりを住民に呼びかけ、1日3～4時間、それぞれが出られる時間帯に関わり、1週間かけて30個作成するなどしています。「サロンなどでいつもお世話になっているから…」と80代の方も吹き流しづくりに参加。また男性も上手にアイデアを出されるなど、幅広い年齢層の住民が関わる場となっています。

年に1回の三世代交流事業（西横町との合同）では、その年の生活に役立つテーマ（例：料理、防犯、人権学習など）を設定し、学習会と懇談会を開催。町内の料理屋のバスを利用し、車など移動手段のない方に送迎を行うなど、できるだけ参加してもらえるよう呼びかけています。昔ながらのつながりはあるものの、なかなか顔を合わせる機会がないなかで、多くの住民が集まる貴重な機会となっています。

▲三世代交流事業で和気あいあいとしたひととき。

具体的な見守り・支え合い活動

具体的な見守り・支え合い活動として、粗大ゴミ回収のお手伝い、資源ゴミ回収活動、子どもの下校時の見守りを行っています。

粗大ゴミ回収については、回収依頼用紙を作成し、全世帯に配布。支援が必要だと申し出があった高齢者世帯を順番に訪問し回収しています。なかには回収途中でその様子を見てゴミを出される世帯も見られます。資源ゴミ回収では、アルミ缶や新聞を回収し得られた資金を地域での福祉活動に活用していきたいと考えています。

子どもの下校時の見守りについては、福祉協力員の声かけで立ち番を行い、その時に対応できる人が出る形で進めていこうと最初の段階で申し合わせて、負担なく長く関われる工夫をしています。

▲力を合わせて資源ゴミ回収に取り組んでいます。

取り組むうえでのコツ、成果

地域の役員が変わっても取り組みをうまく引き継いでいけるよう、町内会の役員を終えた次の1年は協力員として見守り支え合い隊の活動に関わる形で運営しています。こうしたことから、福祉の役員、担い手のヨコのつながりができ、多くの人が課題を共有しながら、関わる活動となっています。

また自治会やふれあいサロンと協力して取り組むことを基本に役割分担しながら進めることで、粗大ゴミ搬出、見守りといった町内会だけではできない（手の届かない）ことの実施につながりました。女性防火クラブによる消火器模擬訓練、ふれあいサロンの定例開催など、互いの取り組みを活かしながら、地域での福祉活動の幅を広げています。

▲吹き流し飾りの前で集合写真撮影。

今後に向けて

見守り、ふれあいサロン等のつながりを通して、日常的な会話を交わす機会も増えるなか、課題を見逃さないように心がけています。今のところ、「買物に行くことが難しい」等といった困りごとの声は聞かれませんが、一人暮らし世帯や高齢者夫婦世帯等がさらに増える状況にあり、近い将来、課題として出てくることが予想され、支援のあり方を考えていく必要があります。

また災害時の要援護者世帯の把握を含め、世帯構成の把握が重要なことから、命のバトンを活用した支援の必要性を感じています。

見守り支え合い隊として、「町内のことはお互いさま」の気持ちを大切に、地域住民の課題をしっかりとつかみ、共有して考える場をつくり、安土地区の小地域ケア会議等と連携して、今後も必要な支援を進めていきます。

▲1年を振り返り、より良い活動づくりを進めます。

事例 4

特定非営利活動法人　篠原シニアネット

～住民の力を分け合って行う地域づくり～

地域の概要

野洲市の北東部、近江八幡市に隣接した篠原駅前自治会は、京阪神のベットタウンとして 40 年ほど前にできた新興住宅地です。世帯数437世帯、人口 1143 人、65 歳以上の高齢者が 274 人（平成 25 年４月現在）で、高齢化の進行や近隣関係の希薄さを憂慮しています。

NPO法人篠原シニアネットとは

平成 23 年に設立したＮＰＯ法人篠原シニアネットは、元気な地域社会と充実したシニアライフの実現を目指して、篠原駅前自治会地域で活動している会員 20 名の団体です。中心メンバーは元サラリーマン。退職を機に、少子高齢化で沈みがちな地域のために自分たちの経験を役立てようと、思いを同じくした仲間とともに、生涯学習の場の提供やまちづくり、高齢者の生活支援など様々な活動を行っています。

NPO 法人篠原シニアネットの活動
1）生涯学習
　パソコン教室、俳句の会、絵画教室
2）社会福祉
　相互支援事業、高齢者サロン
　いきいき百歳体操
3）まちづくり
　光善寺川・公園の清掃、自然観察
　上記以外に準備中、計画中の活動多数！

パソコン教室

まだ任意団体であった平成 22 年から取り組んでいるのが、地域の高齢者を対象にしたパソコンの教室です。自治会館を会場に、パソコンの得意なメンバーが講師役をつとめて毎月開催を続けています。教室で初めてパソコンに触れる人も多く、画面に向かって悪戦苦闘しながらも、みんなで楽しく取り組んでいます。「今はパソコンがあたりまえの世の中、使えない人が置き去りになる心配がある」と、始めたきっかけを話す副理事長の甘庶さん。教室の人気は口コミで広がって、「こっちでも教室を開いて」と隣の町から切望する声も出ています。

まちづくり･美化活動

篠原シニアネットでは河川清掃の活動も行っています。地域を流れる光善寺川周辺は、雑草やゴミなどで景観が悪く、また「大雨の時にあふれるのでは」という地域住民の不安もありました。これはなんとかしなければと、毎月第一日曜日の午前中に会員が集まり、ゴミ拾いや草刈りなど地道な活動を、一つひとつ手作業で続けています。会員の頑張りにより一緒に活動してくれる人も出てきて、地域住民の意識が変わってきているとメンバーは感じています。

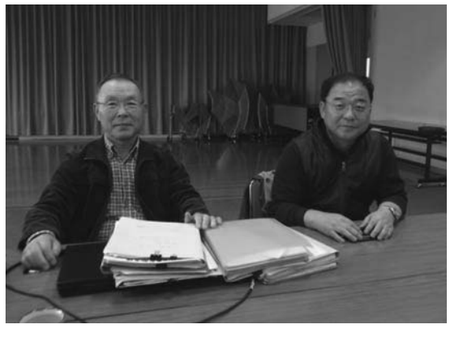
光善寺川周辺は今や地域の憩いの場。地域や近隣の養護学校の子どもたちとともに、川沿いを鯉のぼりや七夕飾りでいっぱいにする計画もあります。光善寺川での活動は、まちづくりや世代間交流にも発展しています。

▲ 清掃活動の様子

相互支援事業

平成25年４月から、日常生活の困りごとを助け合う活動にも取り組んでいます。地域の高齢者から要望の多い、通院や買い物への移動支援と、清掃などの家事支援を会員同士で行う相互援助事業です。原則60歳以上の方を対象に、希望する場合は会費500円の賛助会員に登録。事務局で依頼の受付、支援者とのマッチングなどを行っています。毎月15件ほどの利用があり、通院時の移動支援など時間指定の依頼もこれまでのマッチング率は100パーセント。お互いの都合に合わせて活動することがうまくいく秘訣です。なかには住民同士では解決できない依頼もありますが、そんなときは専門の機関や業者へのつなぎ役も行っています。「高齢者の困りごとは他人事ではない。いずれは自分たちも同じ課題に直面する」と取り組んできた相互支援事業は、地域の支え合いの大きな力になっています。

「時には移動や家事はできなくても俳句ならできる、絵を描くことなら私にもと、その人の持つ私たちの知らない力を分けてくださることもあります。その時が、この活動をしていて一番うれしい時かもしれません。」と吉田理事長。アイデアを形にすることは企業に勤めていた会員の得意分野。集まった提案をもとに、俳句の会や絵画教室などの企画をすすめています。篠原シニアネットの活動はこのように住民の力を紡いで今も広がっています。



▲ 甘庶副理事長（左）と吉田理事長

今後は

「安心、安全で楽しく」をモットーに、このほかいきいき百歳体操や男の料理教室などいろいろな活動に取り組んでいる篠原シニアネット。地元自治会と強く連携しながら、地域に根差した活動を行っています。そのカギになっているのが「地域住民の持っている力を分け合う」こと。「住民は誰もが企業や社会でプロとして活躍してきた人ばかりで、みんな素晴らしい力を持っている、でも地域社会ではその経験が活かされず、埋もれていることが多い。私たちの活動はそれを少しずつ分けてもらっているだけ」と吉田理事長は言います。

甘庶さんは、「ここは歴史も文化も豊かなとても素晴らしいところ。住民同士が助け合って、この土地に暮らしてよかったと思えるように活動を行っていきたい。そして次の世代へ引き継いでいくことが私たちの役目」と話します。

住民の力、地域の人財を大切にして、仲間づくり地域づくりをすすめる篠原シニアネットとして、今後は介護の分野も視野に入れながら、活動の幅を広げたいと考えています。

▲ いきいき百歳体操の様子

事例 5

鎌掛地区社会福祉協議会

～“地域愛”を育む～

地域の概要

日野町鎌掛地区は、日野町の南東に位置し、６つの行政区で構成されています。256 世帯、829 名、高齢化率は 34. 4％(平成 25 年 11 月末時点)と、日野町の高齢化率 26. 1％と比べても高齢化が進んでいる地域ですが、近年は、空き家になっていたかつての日野商人の御屋敷に新しく移り住んで来られる方もいます。地区内には鎌掛城跡のほか、“伊勢参り”の御代参街道が通ることから、かつては城下町、宿場町として栄えました。また、昭和初期には亜炭が採掘できたことから炭鉱のまちとしても栄えましたが、戦後には閉山され、その名残で地下には坑道がアリの巣のように張り巡らされています。

また、鎌掛は町の特産品・日野菜の原産地でもあります。

鎌掛地区社会福祉協議会について

鎌掛地区社協は、区長会、老人会、健康推進協議会、民生委員、福祉協力員など 20 名の役員で構成しており、具体的な事業内容や進め方等の協議については、「定例会」（地区社協会長、福祉協力員、民生委員、町社協理事の 20 名が参加）、ならびに定例会の準備会議としての「事務局会」（地区社協会長・副会長、庶務、会計、民生委員の８名が参加）をそれぞれ毎月１回開き、検討しています。

平成 25 年度の事業は右上のとおりです。なお、地区社協事業の中心的な役割を担っている 15 名の福祉協力員は、２年任期で１年ごとに半数が交代し、各区から女性が２名ずつ推薦されるほか、各区の輪番でさらに男性３名が推薦される仕組みになっています。

鎌掛地区社協平成２５年度の主な事業
- 配食サービス（年７回）
- 健康のつどいウォーキング（年１回）
- 鎌掛っ子クラブ～昔遊びのつどい～（年１回）
- 鎌掛みまもり隊（小学校開校日）
- ほのぼの交流事業（年２回）
- 防災訓練（年１回）
- 納涼祭で不用品バザー（収益は地区社協活動費に）

▲ ほのぼの交流事業

配食サービスを通した「見守り･声かけ」

独居高齢者など高齢者のみ世帯を対象とした配食サービスは、食中毒が懸念される夏季等を除き年間７回実施し、各 80 食程度を鎌掛公民館の調理室で健康推進員と福祉協力員、ボランティアが協働して調理しています。

このサービスは、平成８年に健康推進協議会が独自で始めたものでしたが、平成９年からは地区社協事業に位置付けられ、今年度で 17 年目を迎えました。各区の健康推進員と福祉協力員が申込みを取りまとめ、できたお弁当は福祉協力員が各家庭へ１軒ずつ訪問し届けています。このサービスを通して、健康推進員と福祉協力員がどこに高齢者が住まわれているかを把握するとともに、申込みや配達を通してきめ細やかな見守り・声かけができています。17 年間も継続できた背景には、地域の方々の事業への理解や協力があります。

地域の子どもは地域で育てよう

平成 15 年から始まった、全区民を対象に子どもからお年寄りまで幅広く参加される「健康のつどいウォーキング」は、住民の健康づくりのみならず、御代参街道や天然記念物となっている「屏風岩」など、知っているようであまり知られていない地区内の名所や歴史を学ぶことにより、子どもたちに地域の“宝”を伝承し、地域を愛する心を育むことも大事な目的になっています。

世代間交流にも力を入れており、子どもたちと高齢者がふれあう場として、老人会や子ども会と協力した「鎌掛っ子クラブ」も平成１５年からスタートしました。今年度は、竹を使った竹馬や、竹とんぼ、竹鉄砲、おりがみ、おてだまなどの遊びを高齢者が子どもたちに伝える「昔遊びのつどい」を行いました。手作りおもちゃの作り方や、竹はお湯につけると真っ直ぐになるといった、自然のものを遊び道具にする知恵や知識を伝える場にもなっています。

▲「昔遊びのつどい」でひょうたんの物置づくり

なお、開催するにあたり地域住民に協力を呼び掛けると「こんなことできるで」とひょうたんの置物づくりをしている人や、様々な工具の使い方を教える人など、様々な特技を持った人が集まります。鎌掛っ子クラブは隠れた特技を持つ人の出番づくりの場にもなっています。

また、小学５、６年生の子どもたちが地区内の 70 歳以上の独居高齢者のお宅を、プレゼントと手紙を添えて、夏冬の年２回訪問する「ほのぼの交流」は、訪問を受けたお年寄りが「どこのお家の子かなぁ～」と笑顔で話しかけられるなど、心あたたまるひと時になっています。

このように鎌掛地区では、地域ぐるみで子どもたちの育ちを見守っているとともに、人を思いやる、やさしい気持ちも育んでいます。

「やらないといけないこと」を地道に進める

平成24年５月から鎌掛地区自主防災会が発足し、民生委員や福祉協力員等は避難時に支援を要する人の把握、誘導等を行う「救護避難誘導班」に位置付けられました。地区社協としても災害時に備えて取り組んでいかなければならないという思いから、自主防災会と連携した避難訓練の実施や地区防災マップの作成に向けた検討も進めています。

地区社協会長の福本英一さんは次のように話します。「自主防災会やＰＴＡ、子ども会など、他組織との連携の充実が今後の課題です。とはいえども、既存組織が後継者不足で崩壊の危機を迎えているのも事実です。地区社協では、やらないといけないことをあたりまえのこととして地道に進めてきましたが、今後は活動したい人が自主的に参加できる“開けた組織”にすることが事業継続を考えるうえでは大事なことだと思います。」

なお、福本さんは小学校の登校時に、「鎌掛みまもり隊」として、民生委員、保護者、ボランティアの方などとともに毎朝通学の見守りも行っています。「先日、見守り隊を休んだのですが、次の日に子どもから『おっちゃん、昨日おらんかったな』と言われました。気にしてもらえているんですね。」とうれしそうに話す福本さん。これからもお互いに顔の見えるつながり、子どもたちの“地域愛”は、着実に育まれていきます。

▲ 防災訓練の様子

事例 6

愛荘町 東円堂福祉ボランティアまどか

～「つながりづくり」と「生活支援」から、高齢者の社会的孤立を防ぎくらしを守る～

地域の概要

東円堂自治会は旧愛知川町にあり、世帯数が361、人口は約 1,060 人（平成25年6月現在）高齢化率 24.6%と特に近年、高齢化が進んでいる自治会です。

出会った人には必ず挨拶をするなど、昔からの習慣や伝統を大切にし、お互いが助け合いながら自治会行事にも積極的に参加している地域です。

また、自治会が独自に実施した「災害時に1人も見逃さない運動」の延長で、「東円堂防災・減災支援隊（ボランティア）」が結成されるなど、日頃の防災活動にも力を入れて取り組んでいます。

ただ、最近では少子高齢化の影響で若者や子どもが少なくなり、色々な年代が地域の活動に参加することが難しくなってきています。

「福祉ボランティアまどか」の誕生

東円堂では、１人暮らし高齢者や高齢者世帯が増加するなかで、福祉活動を主におこなう「福祉会」や「福祉委員会」といった組織がありませんでした。一方で、地域には「自治会の行事や活動に参加しにくい高齢者に対して、何かできないか」との声もあり、このような同じ思いを持つ住民を自治会長名で募ったところ、27名がボランティアとして集まり、平成 24 年３月に「東円堂福祉ボランティアまどか（以下、まどか）」を結成しました。

「まどか」は、「地域の高齢者を支援したい」という目的と併せて、「自分たちボランティアも、将来行きたいと思える場所を作りたい」との思いがあり、公民館の建て替えで倉庫にされる予定であった草の根ハウスを活動の拠点として、高齢者の居場所づくりサロン「みんなで集まろうよ」活動を始めました。

「みんなで集まろうよ」～集い楽しむ場、サロン活動～

草の根ハウスを拠点に、高齢者の居場所づくりの活動に「まどか」は取り組み始めました。全戸回覧で広く参加を呼びかけ、最初は「まどか」を東円堂の住民の皆様に知ってもらうために、月１回イベント的に実施しました。

▲居場所づくり活動の拠点～東円堂草の根ハウス

今は、開催回数を増やし毎週水曜日に、地域の高齢者が気軽に集まり、楽しくおしゃべりなどができるような場づくりに努めています。

◀ボランティアの方たちらで作った色とりどりの小物袋

ボランティアも参加者も一緒に、和気あいあいと楽しいおしゃべりの時間が流れています。

居場所づくりの活動内容は、ゆったりとおしゃべりを楽しむ日や、近くのゆたか保育園の園児たちとの交流会・お楽しみ会（月に１回）など多様です。町の地域包括支援センターから健康づくり・介護予防等について学んだり、高齢者やボランティアの特技を活かして、ちぎり絵やかわいい小物作りを楽しんだりしています。

参加者からは「家に居ても１人だから、ここに来ると気が晴れるんよ」との声があがるなど、サロンへの参加がまるで毎週の楽しい習い事のようになっています。

見守り訪問から生活支援へ

「まどか」では年に2回、訪問活動もおこなっています。訪問の対象は75歳以上の１人暮らしの世帯と、80歳以上の高齢者のみの世帯です。

見守り訪問には「お元気ですか!」とのメッセージとともに、ちょっとしたプレゼント、例えば、サロンで参加者と一緒に作ったお手玉や、ティッシュ入れ、防災頭巾などを持参しています。

訪問対象は全部で約100人。1軒1軒、ボランティアが分担して訪問します。“お話し相手”として世間話から日頃の困りごとまで、草の根ハウスでのサロン活動ではお出会いできていない人たちの声に耳を傾けています。

そういった地域の人の声・要望から生まれたのが、ゴミ出しのお手伝い、生活支援の活動でした。現在は3軒のお宅へ、週2回燃えるゴミを出すサポートをしています。

▲ 大きな重たい物でも力を合わせて移動させます。

また、年に2回の粗大ゴミの回収日には、高齢者が処分したくてもできなかった重たい家具類を、「まどか」の男性ボランティアが中心に、軽トラックで集積所まで運び出す支援を行っています。

地域の声･ニーズから必要なことを

定期的に開催している役員会やボランティアスタッフ会の話し合いの中でも、地域の色々な実情があがってきます。

「サロンに出てこない、ずっと家にいる気になる人にはどう働きかけたら良いのだろう」、「高齢者は我慢強い、○○○してほしいといった声を聞き取るには、タイミングをはかることが難しい」、「高齢者の中でも男性が活き活きとする居場所づくりはできないだろうか」等々、地域の中で気になることや心配なことなどが具体的に出ています。

「まどか」では、日頃から見聞きした困り事の中で自分たちが取り組める、ゴミ出しサポートのような生活支援活動をおこなうとともに、「みんなで集まろうよ」活動や見守り訪問により、地域の高齢者の『社会的孤立』や『孤独』が生まれることがないよう取り組んでいます。

自治会からも活動助成を受けながら、今では地域の福祉イベントへお手伝い等にも呼ばれるようになりました。ボランティア自身、まずは自分たちが楽しみながら活動すること、１人で抱え込まず皆で共有することを大事に、地域の中での「ふれあい」や「交流」づくりを進めています。

東円堂で生活する住民が、いくつになっても安心して暮らし続けられる地域になるよう、「まどか」は今後も活動していきます。

各事例の詳細については、それぞれの市町社協へお問い合わせください。

県内市町社会福祉協議会一覧（平成26年3月末現在）

社　協　名	〒	住　所	電話番号
大津市社会福祉協議会	520-8530	大津市浜大津４丁目１－１　明日都浜大津内	077-525-9316
彦根市社会福祉協議会	522-0041	彦根市平田町 670　福祉センター別館	0749-22-2821
長浜市社会福祉協議会（地域福祉部）	526-0037	長浜市高田町１２－３４　社会福祉センター内	0749-62-1804
近江八幡市社会福祉協議会	523-0082	近江八幡市土田町1313 市総合福祉センターひまわり館内	0748-32-1781
草津市社会福祉協議会	525-0041	草津市青地町 1086 番地（旧湖南地域職業訓練センター）	077-562-0084
守山市社会福祉協議会	524-0013	守山市下之郷町 592－1　福祉保健センター内	077-583-2923
栗東市社会福祉協議会	520-3015	栗東市安養寺 190　総合福祉保健センター内	077-554-6105
甲賀市社会福祉協議会	528-0005	甲賀市水口町水口 5609　水口社会福祉センター内	0748-65-6370
野洲市社会福祉協議会	520-2413	野洲市吉地 1127　中主ふれあいセンター内	077-589-4683
湖南市社会福祉協議会	520-3234	湖南市中央１－１　社会福祉センター内	0748-72-4102
高島市社会福祉協議会	520-1121	高島市勝野 215　高島市役所高島支所２F	0740-36-8220
東近江市社会福祉協議会	527-0016	東近江市今崎町２１－１　市福祉センターハートピア内	0748-20-0555
米原市社会福祉協議会	521-0023	米原市三吉 570　米原地域福祉センターゆめホール内	0749-54-3105
日野町社会福祉協議会	529-1602	日野町河原 1－1　勤労福祉会館内	0748-52-1219
竜王町社会福祉協議会	520-2552	竜王町小口 4－1　福祉ステーション内	0748-58-1475
愛荘町社会福祉協議会	529-1313	愛荘町市 731　福祉センター愛の郷	0749-42-7170
豊郷町社会福祉協議会	529-1161	豊郷町四十九院 1252　豊栄のさと内	0749-35-8060
甲良町社会福祉協議会	522-0244	甲良町在士 357－1　保健福祉センター内２階	0749-38-4667
多賀町社会福祉協議会	522-0341	多賀町多賀 221－1　総合福祉保健センター内	0749-48-8127

滋賀県社会福祉協議会	525-0072	草津市笠山７－８－138　長寿社会福祉センター内	077-567-3920